

《博士論文要旨》

中世石造物に関する歴史考古学的研究

山 川 均*

はじめに

本論文は、中世前期における石造物を主な分析対象とし、その造立に至る背景を探るものである。なお、分析に関しては、その様式や形態のみならず、銘文や関連する文献などを総括的に取り扱うが、その過程において、当時の中日交流史の一端や、中世日本仏教史の一面を示すことも目的とする。これらの分析対象や、そこから明らかになる事象は、従前の出土遺物分析を主体とする歴史考古学が不得手とした分野であったし、また、物質資料が有する優れた具体性・客観性は、文献史学的研究の欠を補うものとなるだろう。従来の中世石造物研究は、その美術的価値を論ずるものが大半であり、また形状分析から一定の編年や分類体系は完成しているものの、上記したような、石造物を歴史資料として活用しようとする観点は欠落していたものといえる。

宋人石工渡来の経緯と背景

治承4年（1180）、兵火によって灰燼に帰した東大寺の実質的な復興責任者となった重源は、自らの渡航経験を生かし、復興事業に中国の技法や様式を随所に採用したが、それは石造物においても同様であった。大仏殿内には石造の脇侍や四天王像が置かれ、また中門には石造の獅子が置かれたが、文献史料によれば、これらの石造物を制作したのは中国から渡来した石工4名であった。具体的な彼らの出身地については、石塔銘文から浙江省寧波であることは従来より判明しているが、本論では、具体的な彼らの出自として、寧波東郊外にある東錢湖一帯において、南宋朝廷の有力者・史氏の墓前像群を制作していた石工集団を想定する。

重源は、寧波東郊外にある阿育王寺との関係が非常に濃密であり、渡航時にはここに滞在していた可能性が高い。本論では、重源が渡航時に得た知識から、東大寺復興に際して東錢湖墓前石像を制作していた石工の一派を招聘した可能性を述べる。その際、東大寺石獅子はもとより、寧波周辺の石造物や、さらにそこで用いられている石材を分析対象に据えて論証することとしたい。

伊派と大蔵派

東大寺復興に際して渡来した石工の一人は、石塔銘文によって「伊行末」という名前であったことが判明している。彼の嫡流は行吉－末行－行氏－行恒－行長と続き、傍流の石工も併せて

「伊派」と称されている。この伊派石工は、近畿地方を中心にすぐれた石造物を造立するが、一方、大蔵安清に始まり、安氏－心阿（定安）－光広と続く「大蔵派」と呼ばれる石工集団は、関東（相模）を中心に活動する。この両者は、嘉禎2年（1236）造立の大蔵寺地藏菩薩座像（木像）納入文書の分析から、ごく近い関係にあったことが判明する。

また、先述のように大蔵派石工は名前の一字に「安」字を含むのが特徴であるが、建仁2年（1202）に重源が担当した河内狭山池修復には中国人石工3名が参加しており、その代表者が「宗保」であった。この人物は名前に「安」と同訓の「保」を含むことから、大蔵派石工の祖であった可能性がある。以上の諸点より、大蔵派石工もまた、東大寺復興に際して来日した寧波東鏡湖の石工を祖とするものであったと推定される。

石造宝篋印塔の起源

日本の石造宝篋印塔は1230年代に出現するが、そのモデルとされる中国宋代の石造宝篋印塔は福建省泉州を中心に分布し、他の地域には見られない。一方、宋代に留学・渡航した僧侶の活動範囲は、前出の寧波のほか、同じく浙江省の杭州や天台山を中心としており、福建省泉州まで足を伸ばした僧侶はほとんど管見に入らない。そうした状況下において、天台宗僧侶の慶政のみは、健保5年（1217年）前後に南宋時代の石造宝篋印塔が複数存在する泉州開元寺において修学したことが知られている。また、出現期宝篋印塔の代表格である高山寺宝篋印塔（暦仁2年＝1239造立）は明恵の髪爪塔であるが、この明恵と慶政は非常に密な関係を有していた。インド仏教を敬愛していた明恵の供養塔として、慶政が阿育王塔を原形とする宝篋印塔を選択した可能性をここでは論じたい。

なお、中国の石造宝篋印塔は金属製宝篋印塔を祖形とするが、それらは例外なく金属製宝篋印塔が陶製や木製の台座に乗った状態を石塔に翻案している。一方、日本の出現期宝篋印塔に関しては、台座の無い金属製宝篋印塔単体をモデルにしているのが特徴である。よって、日本の宝篋印塔は、慶政の泉州滞在時の記憶によって創作されたものと思われるが、この際に直接のモデルとなったのは、中国金属製宝篋印塔であった。ここではこうした状況も勘案し、日本で最初に石造宝篋印塔を制作した石工についての考察も行う。

初期宝篋印塔造立の背景

西暦1230年代に京都で出現した日本石造宝篋印塔は、その後約20年の空白期間において、大和を中心に造立される。正元元年（1259）に造立された興山往生院宝篋印塔は、忍性が若年時に修行した竹林寺の墓寺（屍陀林）であり、その翌年造立された額安寺宝篋印塔は、忍性が出家した寺である。この両寺院には、三カ所に分骨埋葬されたうちの2つの忍性墓があり、いずれも彼との深い関わりを示している。なお、このうち額安寺宝篋印塔は、大蔵安清の作である。

ちょうどこの時期（正嘉3年＝1259）、忍性は自らが初代長老となる鎌倉極楽寺の寺地を定め、翌年、同寺は竣工した。この際、石工が多数集められたことが文献史料に記されている。

彼らはこの時期、忍性と関わりの深い場所に、その指示によって宝篋印塔を樹立したのではないだろうか。前出の2塔以外には、唐招提寺宝篋印塔、宝鏡山宝篋印塔（常陸）などが挙げられるが、いずれも忍性と関わりが深い場所である。

忍性の師であった西大寺長老の叡尊は正応3年（1290）に没し、忍性はその2年後に西大寺に戻る。この翌年、前出の興山往生院宝篋印塔から30年以上の時期差を置いて、それと隣接する地に宝篋印塔2基が造立される（円福寺宝篋印塔）。一方、東の箱根山においても、永仁4年（1296）に石工大藏安氏と心阿の手によって宝篋印塔が造立されたが（供養導師は忍性）、これも大藏派の宝篋印塔としては、先述の額安寺宝篋印塔から30年以上の空白期間がある。

こうして見ると、忍性は人生における二度の大きな画期に際して石造宝篋印塔の造立を行った可能性が高い。ちなみにこの形式の石塔（宝篋印塔）がわが国で一般化するのには、この二度目の画期以降のこととなる。

集落の変容とその背景

中世において、大和盆地の村落は一般的に集村形態をとるようになる（環濠集落）。従来の歴史地理学的研究では、そうした集村化はさまざまな要因より、長期にわたって徐々に進行したものとされていた。しかし、近年の発掘調査の成果によれば、それは13世紀中葉から後葉にかけて、比較的短期間のうちに急激に進行したことが判明してきている。たとえば、従来の研究で集村化が最も遅れた事例として挙げられていた若槻環濠集落は、筆者による文献史料の再検討によれば14世紀初頭には集村化が達成されていた。また、発掘調査の成果からも、13世紀中葉にはすでに環濠が存在した可能性が高いことが指摘し得る。

この時期に集村化が急激に進行した背景として、耕地開発の進捗が挙げられるが、こうした開発は「素掘小溝」と呼ばれる遺構によって跡づけることが可能である。その綿密な検討により、この時期の耕地開発の過程が判明すると共に、当時の開発は微高地の削平を伴うなど、工学的な対応が顕著であることもわかる。また、当該期には溜池築造の動きも見られるが、これらは集落環濠などとセットで耕地の灌漑に用いられたものと想定される。

こうした鎌倉時代中後期における開発に際しては、律宗寺院がこれを請け負い、土木工学に専門的知識を有した僧侶が現地で開発を指導していたことが複数の文献から判明する。この場合、僧侶は有能な石工を伴っており、溜池や水路開削でその高度な技術が生かされた。また、開発に供された労働力としては、被差別民が組織化されて徴用された可能性がある。

中世都市と民衆・石造物

中世においては、現代まで継続する都市が多数形成された。中世都市奈良はその中でも代表的な存在である。地理的な領域としては現在の奈良市の市街地にほぼ該当するが、中世に実際にそこに住んだ人々にとっては、こうした市街地以外に土器製作の場や信仰面における境界も含み込んで「領域」として認識されていた可能性がある。

また、中世都市の内部では新興の有力な階層が現れていた。彼らは信仰のシンボルとして石塔を積極的に造立したが、その際に「一結衆」というグループを作り、合力によって大型石塔を造立した。この時期において信仰の核となったのは浄土教系の阿弥陀信仰であり、石塔造立など作善行為の目的は自身や先祖の極楽往生にあった。律宗は、こうした民衆の要請に応える形で配下の石工に大型石塔を造立させたのである。とりわけ鎌倉極楽寺長老の忍性は、こうした浄土教系の動きに敏感な僧侶であり、上述のように忍性が造立に関与した可能性が高い石造物は多数存在する。

また、西大寺流律宗宗祖の叡尊はこうした浄土教系の信仰からは距離を置いていたが、非人救済の一環として般若寺層塔などの大型層塔をそれぞれのシンボリックな場に造立した。